

私が考える発達障害児への合理的配慮は

1. 学校生活を送るための生活支援
2. 学習に必要な環境整備や発達障害の特性に合わせた教材及び教え方の配慮
3. 将来に向けた自立支援

の3つに分かれると考えるが、自分が公立小学校から高校（すべて通常級）に在籍した経験及び言語聴覚士として学校とか変わってきた経験で現在の公立学校（特に通常級）でそれが実践できているかと聞かれると、ほとんどできていないと答えざるをえないだろう。

1. については就学前からは睡眠リズムの乱れ、偏食、身辺自律（特に着替えやトイレ）など、感覚の偏りが大きいため成長過程で大半の人が徐々に身につけていく身の回りに関する事が難しい傾向がある。

感覚過敏や感覚鈍麻などは最近知られてきたが、それにより着られる衣類に限りがある、トイレの感覚が分かりづらい（反対に少しでも尿意や便意を感じる事が苦痛になる）、食べられる物が極端に少ないといった問題が出てくる。

学校は地域によっては小学校から制服があり、制服がないところでも体操着や上履きなどは指定のケースも多いためこれに適応できない、給食が苦痛になるということへの配慮が必要だが、これらについては「わがまま」ということで片付けられることが大半である。

また、学校生活を送る上で必要な身支度や持ち物管理、時間の感覚が身につけにくいことが多く、実際私自身この辺りはかなり苦労した。学校はお知らせなどを未だにプリントや連絡帳で子どもに知らせることが多いが、プリント管理や板書を連絡帳に書き写す作業が困難な子ども達への配慮は殆どなされていないのが現状である。

人間関係においても相手との相互関係や相手の意図をある程度（一般的な5歳前後の能力）読み取れることを前提に学校生活は成り立っているため、それが分からない子どもにとっては学校は脅威の空間である。授業内容が分かる子は授業時間は先生の目がある分だけ安全な時間だが、先生もいじめなどに加担すればあっという間に居場所がなくなるし、学習面に困難さがあればサポートがない状況では授業中は分からない話を聞く苦痛に耐えるか、受け流す方法を磨くしかない。

私にとって特に謎だったのは班行動だった。授業中はもちろんだが掃除当番やクラスの行動まで縛られ、連帯責任に問われる意味はよく分からなかったし、納得がいかなかった。席替えも「好きな人同士」が私の頃は流行しており、それでよく仲間はずれにされた。

合理的配慮の中にぜひ学校で過ごすためのシステムを作っていくことから意識していただきたい。

2. については1, と関係しているが、学習に必要な環境になっているかぜひ一度点検してほしい。例えば教室に不要な貼り紙が多いと集中しづらいし、どこを見たらいいか分からなくなる。廊下も体操着を入れた袋などがぶら下がっていて歩く際ぶつかったり引っ掛けそうになるし、様々な色が目に飛び込んできてとても疲れてしまう。校内放送では突然大きな音が流れてきて驚くことがあった。ハウリングなどがとても苦痛だし、聞こえる音が割れて肝心な内容を聞き取れないこともあった。

先生方の指示もかなり曖昧で、「次の時間は体育です。校庭で〇〇します」と言うだけだと子どもによっては持ち物や着替えのタイミングがよく分からないこともある。例えば5分休みなら着替えを優先した方がいいが、20分休みならトイレへ行ってから着替えた方が効率がいいといった暗黙の了解的な内容は誰も教えてくれない。授業中も暗黙のルールは多数あり、それを破ると先生に嫌われたり同級生たちから非難を浴びることになる。

先生より知っていることがあってもおいそれと口にはいけないし、疑問に思ったことを「質問はありますか?」と聞かれてもそのことばを真に受けて素直に質問すると予定調和を乱すことになるかもしれない。作文なども学校側が期待した内容を書かないと褒められることはない。

発達障害、とりわけ **ASD** の子どもにとって国語の授業は鬼門である。物語文ではよく分からない主人公の気持ちを問われ、詩歌の授業ではよく分からないまま詩を暗唱し、短歌や俳句を作らされる。たまたま好きな子にはいいかもしれないが、大半の **ASD** 児には雲をつかむような話である。

他にも就学前の子ども達の相談などに応じていると、**IQ** は **100** 以上あっても、小学校1年次の学習に必要な概念操作や順序の概念、形の認識、語彙の理解といった能力が育っていないことが往々にして見受けられる。

例えば繰り上がり繰り下がりの計算には数の増減関係や合成分解、5や10のユニットに括ったりそれを分解することが理解できているという前提で授業が進められるが、それをよく理解していない場合は暗記になってしまう。それが露呈するのは割合の授業になった頃であり、分からないことを積み重ねてしまった子ども達は自信をかなり失っている状況になっている。

学校の先生方も標準カリキュラム内のことはよくご存知だが、その前の段階のことをスモールステップで、という話になると分からないことが分からないようで、一部の先生以外はうまく対応してもらえないことが多い。

教科書もディスレクシアの子どもたちが読みやすいような対応はほとんどない。子どもによっては行をまたがって単語が書かれると目で追えずに意味が途切れてしまうことがあるし、フォントや行間の取り方への配慮は少ない。子どもによっては紙と文字のコントラストが強すぎると読みづらくなるが、スリット入のメガネや淡黄色のフィルターを使うと改善されるといった学習への配慮も今後進めていくべき事項である。

ディスレクシアの子どもたちにも利用者がいる拡大教科書や DAISY 対応のデジタル教科書についても知識がある教員は少ない。また、作るのに費用と時間がかかり、必要な時にすぐに手に入らないといった問題もある。

書字についてもディスグラフィアの子どもたちに対してキーボード入力や音声認識ソフトといった代替機器への配慮は一部を除けばほとんどないのが現状であり、そもそも教員がそのような入力装置で改善されることを知らない通常級の先生がとても多い。

教材のプリントなども見方や解き方を理解していることを前提に作られており、ある程度の読解力を求められるが支援者や親御さんにはなかなかそれを理解してもらえない。そのため宿題なども一人では解けず、プリントが溜まっていくことにつながる。本人のレベルに合った宿題の設定なども合理的配慮の中には含まれるべきである。

他の子どもたちへのフォローも欠かせない。本人にばかり配慮しているだけでは合理的配慮もうまく機能しない。本人と周囲の子どもたちのすり合わせができる大人を配置してお互いが快適に過ごせるよう目を光らせることも重要である。

3. については就労や家庭生活においては様々な状況が同時並行で進んでいくため、物・時間・お金の管理（生活の範囲が広がる、一人暮らしを始める）や健康管理を徐々にできるよう取り組む必要がある。

特に第二次性徴による体の変化で自律神経が不安定になり、体調も波が大きくなる。もちろん発達障害ではない人にも起きるが、発達障害の人の場合より顕著になる傾向があるように感じている。特に女性当事者の場合、生理前後や気圧の変化による体調不良で調子がい日の方が珍しい、というケースは多い。

進路を決めていく時期でもあるが、大半の人からすれば通学という一見なんでもないよ

うな行動が実はハードルが高く、青年期以降の当事者の中にはこの習慣が身につかずに進級などができず、結局退学してそのまま自宅に引きこもってしまうケースが散見される。

特性による個人差も大きく、自分でも何が得意・不得意か分かりづらいことで、「これは助けを求めた方がいいのか?」「どう他人に働きかけたらいいのか?」という段階で二の足を踏んでしまうことも多い。日本の場合基本申請主義のため、書類を記入する、支援者に分かるように伝える技術が必要だが、それが難しい発達障害の当事者が多いことを支援者はもっと頭に入れておくべきである。

また、今はネット関係に絡むトラブルなど過去にはなかったタイプの付き合いも出てきており、大人の介入が以前より困難になってきている。周囲の大人も精神的・経済的な余裕がなくなっているだけに学校教育などの場で一定の質が保証された支援策が望まれる。

最近では SST（ソーシャルスキルトレーニング）の重要性が指摘されているが、私はそれと並行して物、時間、お金の管理ができるよう支援していくことが重要だと考えている。就労してよく分かったのがコミュニケーション能力は職種によって求められることが異なること、信用してもらうには時間、物、金銭管理がある程度できていることだった。